

黙示録22章6-21節 「預言のことば」

1A 守る者への幸い 6-15

1B 僕なる御使い 6-9

2B 各人への報い 10-15

2A すぐに来られる方 16-21

1B 来臨への渴望 16-17

2B 預言の完全性 18-21

本文

黙示録 22 章を開いてください、私たちの黙示録の学びがついに最後になります。6 節から読みます。私たちは、最後の幻であり新しいエルサレム、天のエルサレムを見ました。その都の中央から生ける水の川が流れていて、その両側にいのちの木が生えていて、その葉によって癒され、またその実を食べます。そして、神に仕えている人には神の名が額に刻まれており、その人は神のものとなっていて、また王にもなっているということでした。永遠のいのちの姿が、これほどまでに目で見える形で現れているところはありません。

ところで、先週までトルコとギリシアに旅行に行き、トルコにおいては黙示録の七つの教会を全て見てまわることができました。そこで彼らが戦っていた背景を知ると、黙示録にある預言のことばがいかに彼らに分かり易く、真実に迫ったものであるかが分かりました。初代教会の文献によると、パトモス島にいたヨハネは、ドミティアヌス皇帝が死んだ後、解放されてエペソに戻って来たと言われていました。彼はエペソに拠点を置いて活動し、その他の六つの教会、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤは全て、比較的近いところにありますから、啓示を書き記したものを回覧させていったに違いありません。なので、それらの町々にあった背景を知ると、なぜこれらのイエス様の言葉が希望であり、忍耐するための力となったのかを知ることができます。

1A 守る者への幸い 6-15

21 章 5 節までのところで、全てのことを神が、キリストによって示してくださいました。そしてキリストが御使いにそれを託し、御使いがそれをヨハネに伝えました。最後に、御使いがヨハネに伝えたのは、「これらは預言のことばであり、しっかりと守りなさい」ということです。預言のことば、あるいは神のことばがいかに貴いものなのか、これを聞いて、理解し、心に留め、しっかりとその言葉に基づいて生きていくことが必要なのかを教えてください。

1B 僕なる御使い 6-9

6a 御使いは私に言った。「これらのことばは真実であり、信頼できます。」

ということは、主が既に新しいエルサレムを示し始められた時に、お語りになっていました。20 章 5 節で、「見よ、わたしはすべてを新しくする。」また言われた。「書き記せ。これらのことばは真実であり、信頼できる。」と言われていました。あまりにもすばらしい、栄光に満ちたことなので、本当に真実なのか疑ってしまうほどのことなのです。イエス様が復活された時もそうでしたね、弟子たちの間に現れたイエス様を見ても、喜びのあまりにまだ信じられなかったので、イエス様は彼らに食べ物を持ってきなさいと言われて、その場で食べられました。しかし、このような恵みのことばを、真実なものであり、信頼に値すると受け入れることこそが、私たちが行うべきことの始まりです。マリアも、キリストが自分の胎に宿ったことについて、「主によって語られたことは必ず実現すると信じた人は、幸いです。(ルカ 1:45)」とエリサベツが言いました。

いかに預言のことばが確かであるのかは、ペテロが第二の手紙で話しました。自分がイエス様の栄光に変貌した姿を見た目撃者でありながら、それでも、「さらに確かな預言のみことばを持っています。」と言ったのです。そしてそれを心に留めておくようにと指示しました。「夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。(1:19)」

6b 預言者たちに霊を授ける神である主は、御使いを遣わして、すぐに起こるべきことをしもべたちに示された。7 「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」

なぜ、それだけ預言が確かであるかと言いますと、「預言者たちに霊を授ける神である主」とあるように、主ご自身が霊を彼らに授けているからです。第二ペテロ 1 章には、聖霊によって預言者たちはこれらの言葉を書き記していると教えています。私たちは、聖書が神の聖霊の導きによって書かれていることを知っています。そして、コリント第一 2 章によると「御霊に属することは御霊によって判断する(14 節)」とあります。だから、預言者たちだけでなく、それを聞いている私たちも、その言葉を聞く時に御霊によって聞く必要があります。人間的な物差し、判断基準ではなく御霊に導かれた、御霊による理解を持つように願うのです。

そして、御使いがここで強調しているのは、「すぐ」ということであります。いつでもおかしくないような状況なのだという注意深さ、用心した思いが必要です。何か事故が起こる時は、「自分には起こるはずがない」という油断から始まっています。本当に、いつくるのか分からないという切迫性を持ち続けることが大切です。聞いてはいても、いつも聞いているからであるとか、「自分はもう場慣れしているし」とか、油断があると、いつ来てもおかしくないのです。黙示録や他の聖書箇所使われている「時」というのは、いわゆる時間的な時だけでなく、「機会」を意味している言葉が使われています。例えば、「今は収穫の時」というのは、収穫する機会が増えているのだということです。すぐに起こっても、全くおかしくない状況なのだよということが、警告されていることなのです。

しかし、これは警告や警戒という意味だけでなく、励ましの言葉でもあります。「この書の預言のこと

ばを守る者は幸いである」とイエス様は言われます。苦難や試練がある時に、今、この時にあなたをそこから救い出す、その助けは今もここにあるという励ましなのです。もちろん、イエス様はすぐには来られないかもしれません。主がこのように約束されてから、既に 1900 年ぐらい経っています。けれども、今すぐにでも来られるという希望を持っている人には、御霊によってその希望に相応しい助けを降り注いでくださいます。将来にある報いを、御霊によって今、その報いの中に生き、前味を楽しませてくださるのです。だから、預言のことば、そこにある約束や命令を堅く握っているのです。

8 これらのことを聞き、また見たのは、私ヨハネである。私は、聞いたり見たりした後に、これらのことを示してくれた御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。9 すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、預言者であるあなたの兄弟たち、この書のことばを守る人々と同じしもべです。神を礼拝しなさい。」

ヨハネが、この過ちを犯そうとしたのは初めてではありません。子羊の婚宴の時に、花嫁が輝きよい亜麻布をまとっている姿を見た時に、御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした(19:10)。なぜ、そうになってしまうのでしょうか？それは、黙示録を読めば、御使いの姿があまりに栄光に輝いていて、まるでイエス様ご自身のご自身のようであったからです。最後の七つの災害を携えていた御使い七人について、「彼らは、きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。(15:6)」とあります。これは、主なる神の聖所の中に彼らがいる、そこから出てきたばかりなので、その栄光の輝きを放っていたからです。しかし、自分はあなたがたのような預言者、またその預言のことばを守る人々と同じように、しもべなのだ、神のみを礼拝しなさいと強く戒めています。

神の器が用いられると、神ご自身ではなく、その器をあがめてしまうという誘惑は誰にでもあります。特に、全てのところに神々がいると信じている多神教を信じてきた人々には、敬いの思いが与えられるとその礼拝の対象を、神ご自身ではなくその器に対して行なうとしてしまいます。コルネリウス(コルネリオ)のことを思い出してください。彼はローマの百人隊長でしたが、神を敬っている人でした。そこに使徒ペテロが幻によって呼ばれて、彼の家に入ってきました。「ペテロが着くと、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。するとペテロは彼を起こして、『お立ちください。私も同じ人間です』と言った。(使徒 10:25-26)」その敬うという思いは、正しいのです。しかし、神はすべての栄光をご自分のところに持つてくるように願われています。神のみが栄光を受けるべきであり、他のものたちはみな同じ僕なのです。

特に今、すばらしい啓示が与えられ、恵みの言葉が与えられている時に、このようなことが起こっています。主が生きて働かれる時に、その栄光を神ではなく人に、その注目を神ではなく人に持つていく力が、私たちは肉の中に生きていますので、どうしてもそうなってしまいます。御使いのヨハネに対する言葉は、私たちに対する戒めです。

2B 各人への報い 10-15

10 また私に言った。「この書の預言のことばを封じてはなりません。時が近いからです。」

預言の言葉が信頼に値することを語った後で、御使いは、これらのことがことごとく実現するのだということを強調するために、「封じてはなりません」と言っています。この言葉は、かつて神がダニエルに与えた言葉と対比させるためです。ヨハネの受けた啓示は、ダニエルの受けた啓示と重なる部分がたくさんあります。特に獣について、荒らす憎むべき者についての預言は、ダニエルの受けた啓示の続きです。ダニエルは、それらの啓示を受けた後に、寝込んでしまったりして、かなりの衝撃を受けていました。そして、立ち上がりはしたものの、その意味を知りたくても、理解できませんでした。けれども御使いが、このように話したのです。「ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと捜し回る。(12:4)」知識を増そうと捜し回るとありますが、その知識と知恵の宝が満ちているキリストが、既に来られました。この方によって、律法と預言者のすべてが成就します。この方が来られるということは、天の御国が到来したと言っても過言ではありません。この方が来られるのだから、ここの預言の言葉はすべて成就するのであり、封じていてはいけないのです。

ここに、私たちが聖書の言葉に対する姿勢を試されます。預言者の語ったすべてのことを信じるのではなく、その一部をえり好みして受け入れていることが多いからです。イエス様が復活された時に、ご本人が弟子たちに解き明かされ、律法、預言者、詩篇の聖書全体において、ご自身について書かれていることを解き明かされました。心が鈍くなっているのを、イエス様が開いてくださいました。パウロも、エペソの長老たちに、「神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。(使徒 20:27)」と宣言しました。

11 不正を行う者には、ますます不正を行わせ、汚れた者は、ますます汚れた者とならせなさい。正しい者には、ますます正しいことを行わせ、聖なる者は、ますます聖なる者とならせなさい。」

御使いは、今、招きの言葉を与えています。どちらの道、二つの道があり、あなたがどちらかを選ぶのです、と説いています。聖書にある多くの人の説教、教えはその最後が、このようにしめくくりになることが多いです。モーセも、申命記においてこう言いました。「申命 30:19 私は今日、あなたがたに対して天と地を証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいをあなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。」そしてマタイ 7 章の、山上の垂訓においてイエス様は、狭い門から入りなさい、滅びに至る門は大きいのだと言われます。

そして、終わりの日には、これまで明らかにされていなかったことも、明らかにされる時です。「ますます」という言葉が大事です。また、毒麦が蒔かれた畑の喩えにもありました。それまでは、正しい者、不正な者の区別が難しかったのですが、それが終わりの日には実が明らかにされて、それで主が収穫します。そして、「ますます」という言葉には、さらに、「あなたが自分の生活を支配できなくなるよ」

という警告と、再び励ましがあります。警告とは、自分が自分の道を選ぶのであれば、どんどんその泥沼の中に入っていく、ますます汚れた者となってしまうのだということです。励ましとは、自分が御霊に導かれることを選ぶ時に、聖められるのは、自分のすることではなく、神の御霊がどんどん行ってくださることだということです。自分は選ぶことが求められていますが、その後のことをしてくださるのは、神なのです。

12 「見よ、わたしはすぐに来る。それぞれの行いに応じて報いるために、わたしは報いを携えて来る。

イエス様が、ここから語り始められます。御使いに語らせていたのですが、今は、主ご自身が語っておられます。「わたしはすぐに来る」と再び、言われます。その時に何が起こるか？と言いますと、しもべに対して主人が行なうことです、そうです報い、報酬です。会社において、月給があります。銀行の口座に振り込まれた給与明細をもらう時ですね。報いがあります。私たちは、山上の垂訓の学びで、人は必ず報いを求めながら生きているのだということを学びました。しかし、その報いを人から求めることが多く、しかし私たちは、私たちをこよなく愛してやまない父なる神と親しく交わり、この方からの報いを期待しなさいとイエス様は教えられました。

そしてその報いというのは、預言のことばを守っている者たちにとっては、罪に定めるようなものではありません。黙示録 20 章に確かに、最後の審判があり、その時に復活した者たちは、行いに応じて裁かれ、燃える火と硫黄の池に投げ込まれます。しかし、勝利を得る者には、「第二の死によって害を受けることはない。(2:11)」とイエス様は約束されていました。ここでの報いとは、褒美を与えるための報いです。「キリストの裁きの座」とも呼ばれるもので、ギリシア語では「ビーマ」という裁判席に使われている言葉です。どのように裁かれるかを、コリント第一 3 章 11 節から 15 節に、イエス・キリストという土台にそれぞれがどのように建て上げられているかについて、金、銀、宝石、木、草によって建て上げられている姿を書いています。そして火が来ると、その真価が試され、燃えつくされてしまっても、「その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」と書いてあります。いつも自分の行なっていることが、主の名によって行なっているのかどうか、それを大切にする必要がありますね。

13 わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」

イエス様が 1 章において、語っておられた言葉ですね。神がイザヤ書において、最初であり、最後であると宣言されていましたが、イエス様がここで明確に、ご自身に対してそう言われているということは、父なる神とわたしが一つであることを宣言しているに等しいです。そして、イエス様が初めから終わりまですべてを支配されているということです。私たちが、自分の生活を支配したいと願っている中で、イエス様はご自分だけが栄光をお取りになるために、「わたしがアルファである、オメガなのだ」と宣言し、ご自分が支配者、全能者であることを宣言しておられます。

14 自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通

って都に入れるようになる。15 犬ども、魔術を行う者、淫らなことを行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は、外にとどめられる。

黙示録には、何度となく、「白い衣」や「衣を洗う」という言葉が出てきました。それは、一つに子羊の血によって清められたものです。「7:14 この人たちは大きな患難を経てきた者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」そして、子羊の血によって清められたので、正しい行いという白さを持っています。「19:8 花嫁は、輝きよい亜麻布をまとうことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」私たちが、いかに困難を耐え忍び、戦い抜く必要があるかを教えていますね。

そしてそこにある報いがいのちの木の実であり、門を通過して都に入るということです。その反対に、汚れや不正を選んだ者たちは、ますます汚れるようになると先ほどありましたが、そういった者たちはここにあるように外に留められます。今回のトルコ旅行、エペソの遺跡を歩きながら思ったのは、これがエペソに住む聖徒たちにいかに励みになったかということです。町には、汚れがいっぱいでした。古代の医療センターのアスクレピオンの神殿がありますが、それは薬局の神であり、そこで行われていたのが魔術です。そして、ケルスス図書館という、ローマにおける三大図書館の一つがありますが、その目の前に遊郭がありました。そして、不品行によって望まぬ妊娠をしますから、それを遺棄するところもあるそうで、人殺しも当たり前のように行われ、それからもちろん、あらゆる偶像の神々や、皇帝を神としてあがめる神殿や門がたくさん遺っています。それが、町の中に入るとあります。しかし、終わりの日には立場が逆転するのです。衣を洗う者たちが、門を通過して都に入れるようになります。

2A すぐに来られる方 16-21

こうして、預言の言葉を守る者に対する幸い、その報いをイエス様は語られました。次に、そのイエス様の来臨を切望する言葉が並んでいます。

1B 来臨への渴望 16-17

16 「わたしイエスは御使いを遣わし、諸教会について、これらのことをあなたがたに証した。わたしはダビデの根、また子孫、輝く明けの明星である。」

イエス様が再び、直接語られています。1章の初めに、どのようにしてヨハネにまで預言が与えられたのかが書かれていましたが、神がキリストに、キリストから御使いに、そして御使いからヨハネにとという経路でしたが、七つの教会、諸教会に対してもそうでしたね。それぞれの教会に、御使いを遣わして、それでイエス様が語られました。そしてイエス様のご自身を宣言されています。「わたしはダビデの根、また子孫」と言われています。イザヤ書 11章のメシア預言からのものです。「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。(1節)」ダビデから出て、そしてそのダビデの子であるという宣言です。イエス様は、マタイ 22章 42節から、ダビデの子についての詩篇の預言を取り上げて、パリサイ人らに問いかけておられました。ダビデがキリストに対して主と呼んでいるのに、なぜダビデの子なのだろうか？ということです。人であるのに、永遠の昔からおられる神と一つの

だということをイエス様は語っておられました。

そして、明けの明星については、私たちに有名なのはイザヤ書 14 章のルシファーです。けれども、そもそもこれは神の栄光の輝きと希望を示す言葉であり、神のそばにいる御使いがそのような輝きを持っていたということです。バラムが預言した時に、「ヤコブから一つの星が上り」とありました(民数 24:17)。ペテロは第二の手紙 1 章で、明確にイエスさまのことを明けの明星として使っています。マラキ書の最後には、キリストは義の太陽として出てきますが、明けの明星は夜明けを示す徴であり、これからの主の到来を示しています。そして主が来臨されたら、その光は太陽のような輝き、ゆえに義の太陽と呼ばれるのです。

17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」これを聞く者も「来てください」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。

「御霊と花嫁」とあります。これは、間違いなく御霊と御霊によって生まれたキリストの花嫁、教会のことを指しています。教会は、御霊によってキリストの体の中にバプテスマが与えられた存在として、パウロはコリント第一 12 章で話しています。御霊によって御体があるのです。そして、花嫁はもちろん、エペソ 5 章の夫と妻との関係のところで、教会がキリストの花嫁であることがはっきり書いています。だからこそ、花嫁がもっとも求めていること、花婿が自分のところにやって来ることです。当時の結婚式は、あの十人の乙女の喩えでよく表れていますが、花婿が花嫁の上に迎えに来るところから始まります。それがいつ来るかは知らされていません。なので待っているのです。そして、引き取られて花婿の家に招かれ、そこで結婚式を執り行います。花嫁が全身全霊で、花婿を「来てください」と切に願うその姿です。「来てください」という、たった一言ですが、この切実で恋い慕うような願いがあって、私たち教会は生きています。

そして、同じ「来てください」でも、福音への招きがあります。イエス様に対して使う時は、「来てください」ですが、まだイエス様のところに来ていない人に対しては、「来なさい」ですね。そしてその招きは、広く開かれています。「渇く者は来なさい。いのちの水が欲しい者は、ただで受けなさい。」であります。ここには条件がありません、「ただ」と強調しています。神に渇いている者、いのちの水が欲しいこと、この願いだけでよいのです。そのまま、イエス様のところに来ます。そのまま、です。来ているようにしながら、実は心をそのまま明かしていないことがあります。

2B 預言の完全性 18-21

18 私は、この書の預言のことばを聞くすべての者に証しする。もし、だれかがこれにつけ加えるなら、神がその者に、この書に書かれている災害を加えられる。19 また、もし、だれかがこの預言の書のことばから何かを取り除くなら、神は、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、その者の受ける分を取り除かれる。

再び、預言のことばの完全性について話しています。付け加えても、取り除いてもいけないということですが、モーセも律法の完全性について同じことを、最後の説教、申命記で言っていました。「4:2 私があなたがたに命じることばにつけ加えてはならない。また減らしてはならない。私があなたがたに命じる、あなたがたの神、主の命令を守らなければならない。」そして、イエス様も山上の垂訓の最後で、ご自分のことばを聞いてそれを守る者は、岩の上に建てた家に似ていると語られました。その手前でイエス様は何を語っておられたでしょうか？そう、偽預言者のことです。付け足したり、取り除いたりする者たちのことです。使徒ヨハネも、黙示録でイエス様から、ニコライ派の者であったり、バラムの教えを奉じる者であったり、女預言者イゼベルについての警告をしていました。神のことばを、自分の思いや考えによって歪めることはとても簡単にできてしまいます。けれども、神のことばだからということで、神からのものであるとして自ら騙すか、あるいは他の人から騙されることがあります。

興味深い表現ですが、付け加えるなら、黙示録にある災いが付け加えられる。取り除くなら、黙示録にあるすばらしい約束、いのちの木と聖なる都から取り除かれるということです。神のことばだけでなく、教えられたところに留まらず、人間的なもので付け加えていくという愚かさがあります。その付け加えは、良いものになることなく、かえって悪いものがやってくるようになります。完全なものに付け加えたら、不完全になるのは目に見えています。そして神のことばが厳しいと思って、その部分を取り除くと、その良い部分が取り除かれるのです。自分は悪いところだけ取り除こうとするのですが、必ず良いものを取り除きます。ここもまた神のことばは完全だからです。私たちは、たとえ自分では理解できなくとも、そのまま預言のことばを信頼できるもの、真実なものとして受け入れるのです。

20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。

イエス様が、先ほどの御霊と花嫁が、「来てください」と言ったことに応えてくださっています。「しかり、わたしはすぐに来る。」そして、それにこたえています。「アーメン。主イエスよ、来てください。」パウロも、コリント第一 16 章、最後のところで、「主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」と言いました(22 節)。マラナタです。これを初代教会の人たちは、挨拶する時に使っていました。私も時々、メールをいただく時にこのことばで文章をしめくっていることがあります。思い出せるのでいいですね、マラナタ。主よ、来てください。

21 主イエスの恵みが、すべての者とともにありますように。

最後の言葉は、「主イエスの恵み」です。この方が私たちを愛して、命をお捨てになり、罪から解放するために血を流してくださいました。この恵みが、黙示録の啓示のすべてであります。恵みが、みなさんにもますます満ちあふれますように。そして新しい都に入るにあたって、その豊かさをもって入ることができるようにお祈り致します。